

教育的現實

——教育哲學基礎論——

森

昭

序論

この論文は、將來教育活動に従事する事を以て少くも現在の希望とする私自身に對する行動假説として、近時漸く體系的組織を明確にし來つた哲學的私見を原理としつゝ、組織せる教育哲學の體系的論述である。従つてこれは學を媒介とせざると言ふ意味に於ける單なる常識的教育觀ではない。と言つても必ずしも私は教育に關する常識の持つ直觀的洞察を輕視するものではない。假令綿密なる學的反省媒介を必ずしも行つては居なくとも、却つて教育に對して優れたる直觀を持ち又卓越せる教育的實踐力を有する尊敬す可き教育者が、單に教育界のみならず家庭にも社會にも少からず存在し、事々しく學的反省媒介をなす事によつて教育の具體性を屢と喪失する教育學者達よりも、一層具體的な教育を實踐しつゝある事實を知つて居り、而も私自身が教育的才能に恵まるゝ事少きを歎ぜざる得ない者である。然しながら之等の人々の常識的教育觀が個々の教育實踐において如何程具體性を發揮しようとも、猶それが學的なる反省媒介を経ざるものたる限り、私見的主觀的であり、公開的客觀性を有せざるものなる事是否定出來ない。而

も亦常識的教育觀が自己矛盾に陥る事なくその具體性を發揮し得るのは、多くの場合教育者と被教育者との單に個人的なる教育關係に於いてであつて、かゝる個人的教育關係の客觀的基礎即全體的主體とも言ふ可き社會乃至國家の地平が開かれた場合、常識的教育觀は直ちに自己矛盾に陥るとは限らないにしても、猶少くもそれは個人關係の立場に即目的に止まつて居る事を得ず、自己自身を絶對否定して具體的なる主體即客觀的乃至自己即國家（社會）的立場に轉換せざるを得ない事必然である。この主體即客觀的立場への轉換を媒介するのが學的反省考察に外ならない。私の教育哲學も正にかゝる轉換の境位に成立するものであり、従つて本來實踐的動機を以て組織されるものである。然しながらそれが單なる常識的教育觀でなくして教育哲學たらんとする限り、實踐的要求に機縁付けられながら、而もそれに由つて必然的に規定される事なく、却つて他方學としての自律的體系性を備へなければならぬ。そのためには先づ教育に關する學的諸立場と對決する事が要求されるであらう。所が最近世に到つて漸く組織されるに到つたこの若き教育學には、一律に處理し得ざる程に多くの立場が分立し夫々獨自の陶冶理想を掲げて相反對立して居る。（人類教育・人格教育・社會社會・民族教育・國民教育・個性教育・性格教育等枚舉に遑なし）加之最近の研究は教育の本質に關する幾多の二律背反を別抉して居る。（vgl. z. B. P. Luchsenberg, P. Vogel, K. E. Sturm, J. Cohn, E. Yavinkele, G. Genille）かゝる相反的諸教育學説を止揚す可き高次の立場に立ち、幾多の二律背反を解決する具體的立場を建設す可き事を學の自律的理性は要求するのであり、このために方法論的反省を必然に惹起せしめるのである。私は先づ現代の諸學説の分化を教育科學と教育學との相反的の二大潮流に分類し、特に兩者に對する對決批判を通じて得られたる具體的なる哲學的方法を以て右の自律的理性の要求を先足せんとしたのである。私の未熟なる卒業論

文「教育の論理」はかゝる意圖の下に展開されたものであつたが、これに於いては未だ方法論を言はず内實的に支える哲學的世界觀が十分な具體性を以て對自化されては居なかつたのである。この論文に於て私は不完全ながら絕對生命の哲學を以前よりも稍具體的に展開し、之れを原理としつゝ教育哲學の體系を組織しようと試みた。と同時に又、教育哲學は教育と無關係にそれ自體に於いて組織された哲學體系の教育への單なる應用であつてはならず、却つて教育哲學の原理たる哲學體系そのものが教育の哲學的反省として教育との具體的媒介關係に於いて對自的に組織される可きであり、かくて組織される哲學體系と教育との即且對自的媒介として教育哲學は組織されねばならぬ。即ち教育哲學は文字通り教育 \parallel 哲學（ \parallel は絕對媒介的關係を示す）でなければならぬといふ、日頃の希望的確信を幾分とも實現し度いと念願したのであるが、果して十分それが實行されたか否かは先達の批判に俟つ外ない。

さて教育哲學の三部門として、教育の客觀的基體即全體的主體と言ふ可き教育的現實の學と、被教育者たる人間個體の發達育成を考察把握せんとする教育的人間學と、更に被教育者と教育者との教育的關係を反省把握せんとする學とが成立するであらうと言ふのが、卒業論文に於ける暫定的見透しであつたが、これは今も猶訂正の必要を感じざるが故に、この論文に於いてもこの見透しに基いて特にその第一部門たる教育的現實の學を展開せんとするものである。然し右の三部門の相互媒介的聯關に於いてのみよく教育は完全に把握し得らるゝものなるが故に、假令その都度教育的人間學的考察と教育關係の反省とを考慮媒介したとは言へ、猶第一部のみ獨立に展開論述する時、教育の現實的觀點からの一方的把握にともすれば陥らんとした事は、考察方向の性格上止むを得ざる事であり、特に教育關係の主體的反省把握が稀薄であるといふ教育實踐者達からの批判は甘んじて受けなければならぬ。然し多少の偏倚と未熟・

抽象と過誤を覺悟しつゝもこゝに教育的現實の學を展開せんとするのは、教育を眞に具體的に遂行し又學的に反省せんとする者にとつては、教育的現實の主體即客觀的把握が無視す可からざる意味を持ち、而も今日の教育學に於いてはこの部面の分析がその必要なるにも拘らず行はれる事が比較的少い、と言ふ私見に基くものである。

〔一〕 教育的現實——教育哲學

我々は、現實に、生きる。これは直接なる我々の生體驗である。この生體驗を時空的に具體化すれば、我々が現實より生まれ、現實に於いて生活・勞働し、且つ現實を創造建設せんとする、と言ふ現實の事實であり、更にこれを認識的に反省すれば、現實が我々の生存の生命的根源であり、生活・勞働の具體的基底であり、而も我々に由り創造建設される組織である、と言ふ現實の自覺となる。現實の事實として現實の我々に由り自覺せられたる現實の生體驗は、現實が單なる客觀的實在ではなくして同時に主體的自己を構成契機とする所の、兩者の複雑なる客觀即主體的聯組織なる事を示す。故に現實は單に客體的に存立するのではなくして同時に主體的に生きられるのであり、従つて單に客觀的に認識されるのではなくて客觀即主體的な生體驗に於いて自覺されるのである。逆に現實は單に主觀的に生きられるのみならず同時に客觀的實在性を持つのであり、従つて現實の生體驗は單なる主觀的意識ではなくて同時に客觀性を媒介した客觀即主體的自覺である。現實は常に客觀即主體的であつて、客觀性の面に現實の實在性があり、主體性の面に現實の自覺性がある。而も客觀的實在性と主體的自覺性とは、一面相互に呼應的聯關を持ち相互依存の關係にありながら、他面相互に矛盾的に對立し他に還元し盡し得ざる超越性を互に保有する。自覺はこれに矛盾的に

對立しこれを否定的に超越する客觀的實在を否定的に媒介する主體即客觀的自覺たる時、初めて充全且つ徹底的である。然るためには自覺は自身に主觀的に内在して居る事は出来ないのであつて、却つて自覺と共に實在をも超越し而も兩者の根源たるものに否定的に媒介されねばならない。自覺の徹底は、自己を上を超越して絶對に撞着せしめ同時に自己を下を超越して生命に撞着せしめる。絶對と生命とは相反疎外しつゝ同時に呼應媒介して現實を成立せしめる。これが自覺的主體たる自己の信であり、この信を證するのが現實に於ける自己のはたらきである。

我々は現實を相反呼應的なる絶對と生命との疎外即媒介的なる聯關として自覺せんとする。所がこの聯關は矛盾對立的なるものをその兩項とするが故に本質的に自己矛盾的であり、従つて必然的に自己否定に陥つてそれ自體に止住する事を得ない。さればこの聯關は當然靜的たり得ずして動的でなければならず、不動不變の聯關として實體的に存立するものでなくして、却つて運動するものであり行爲的につくられるものである。現實はその存在論的自覺に於いてその自己矛盾性及びこれに基く動性を開示する。所が現實の自己矛盾―動性は本來存在的なるものであり、存在論的に内在化し盡されざるものである。現實の自覺は同時に存在的自覺でなければならぬ。已に述べた如く現實は我々の生存の生命的根源であり、生活・勞働の具體的基底であり、而も我々に由り創造建設される組織である、と言ふ事が即ち現實の存在的自覺の根幹である。この存在的自覺の自覺性に已に即自的にはたらく存在論的反省を對自化するれば、現實の構造―構成が單一平面的でなくして複雑重層的であり、單一の存在次元より成立つものでなくて數多の存在次元を契機となす、と言ふ存在論的自覺に達する。即ち後に綿密に展開する可き事を今先取して言へば、現實は自然生命的・身心的・勞働的・理性的・精神的・人格的の諸次元を構成契機となし、重層的構成をなす。然しこ

の階層的なる存在論的自覺はそれ自體に於いては之等諸次元の相互聯關に關する具體的自覺とはなり得ない。この階層的自覺は嚮の現實の動性に關する存在論的自覺と媒介されねばならず、かくて初めて階層的自覺は諸次元の動的聯關に媒介されて主體化され、動的自覺は階層的諸次元に媒介されて具體化される。こゝに現實の最も具體的なる存在の即存在論的自覺が得られるであらう。即ち現實は、相反即呼應的なる絶對—生命の聯關が、各存在次元に於いてその次元に固有なる形態を形成しつゝ、而もその形態が必然に陥る疎外を絶對否定的に媒介する事により高次の次元に飛躍的に轉換する運動の、その都度完結的にして未完結的なる總體なり、と暫定的には言ひ得るでもあらうか。

絶對—生命の相反即呼應的聯關の、各存在次元を形成しつゝこれを突破する疎外即媒介的運動は、要するに絶對—生命の聯關の具體化であり、結論を先取して言へば、生命の生成發展進歩向上であり、絶對媒介的なる個的主體に向つての生命の主體化の運動であると共に、絶對の具體化であり、従つて又絶對の現成たる人倫の具體化の運動に外ならない。絶對と生命とは一面呼應的聯關性を持つが故に、生命の發展向上と人倫の具體化とは一面呼應的な聯關にあり相互促進的な關係にあるであらうが、猶絶對と生命との根源的なる相反對立性に基いて、兩者が一面相反的な葛藤にあり相互阻害的な關係にある事も否定出來ない。先取的に言へば、夫々勝れて自然生命的・身心的次元及び労働的・理性的次元に於いて形成される絶對—生命の聯關たる共同體及び結合社會に於いては、一は人倫の規制が一方的に優勝的であり他は生命の發展進歩が一方的に優勝的であつて、共に兩者の即且對自的絶對媒介に達し得ないのである。生命と人倫との呼應即相反的なる聯關葛藤の中に、生命の發展向上との相即に於いてその主體性を育成し漸次具體的となつてゆく人倫の中に於いてその人倫性を陶冶する個的主體的自己が、絶對媒介の樞軸として客觀即主體的に

はたらく。具體的に言へば自己は共同體に於いて生活し結合社會に於いて勞働し、この生活と勞働とに於いて育成陶冶せられたる具體的内實を以て、呼應即相反的なる絶對——生命の即且對對自的絶對媒介を實現せんとする。これ即ち國家の建設に外ならない。國家は生命の主體化的發展向上の最高次元であり人倫の具體化的建設の最高段階であり、而も兩者の絶對媒介的均衡に於いてその眞實態を實現する。眞實の國家の充全なる建設主體として自己即國家の聯關を充實實現する時、自己は生命の發展向上の方向に最高の主體性を發揮するのであり、對絶の人倫的現成の具體化の方向に最高の人倫性を實現するのである。生命的主體性と絶對現成的人倫性との絶對媒介的主體たる時自己はその最高の實存性を發揮し、同時にかゝる實存的個人をその建設成員とする時國家は最高の眞實態を實現する。

我々は、現實に、生きる、と言ふ事は實は、我々は、國家に、生きる、と言ふ事であり、更に、我々は、國家を、建設する、と言ふ事でなければならぬ。こゝに存在と當爲・事實と理想との複雑微妙なる呼應即相反的聯關葛藤がある。存在・事實は當爲・理想を基底的に支擔すると共に、當爲・理想は存在・事實を超越的に規制する。眞實の國家建設の主體として自己が最高の實存性を發揮する事は存在たると共に當爲であり、國家が實存的個人を建設主體として最高の眞實態を實現する事も亦事實たると共に理想である。當爲を實現し理想を達成するためには、當爲を目指し理想を志向する存在と事實との反復的充實具體化が要求される。最高の實存たるために自己は却つて低次の存在次元に於ける自己を反復的に充實しその内實を具體化せねばならぬ。自然生命的次元より人格的次元に到る生命の連續即飛躍的なる發展向上に相即して、自己は連續即飛躍的にその主體性を育成伸長せねばならず、又共同體・結合社會及び國家に於いて次第に具體化される人倫に生きつゝ、自己はその人倫性を次第に陶冶強化せねばならぬ。同様に最

高眞實の國家たるために國家は却つてその低次なる事實的基底を反復的に充實し具體化せねばならぬ。勝れて人倫の基底たる共同體と・勝れて生命の發展向上の基底たる結合社會との事實的基底の充實具體化を俟つ事なしに、國家はその當爲・理想を實現し得ぬ。然し又自己が自然生命的・身心的及び勞働的・理性的なる存在次元に即目的に生きてここに停滯し、當爲を志向し理想を達成する事を怠る時、存在即當爲的たる自己の具體的本質に背き當爲を捨て、存在に直接に身を渡すのである以上、これは自己の本質に對する自己疎外であり、又抽象的非本來性への墮落に外ならぬ。同様に國家が共同體的及び結合社會的なる事實的基底の孰れかであるに止まつて、その眞實態を目指しこれを實現する事のなき時、事實即眞實なる國家の具體的本質に背き眞實態の實現を放棄して事實的社會存在たるにすぎざる以上、これは國家の本質に對する國家の自己疎外であり抽象的非本來性への墮落と言はねばならぬ。所が自己の本來的實存への發達育成が、それ自體に於いてはそれの抽象疎外態と言ふ外なき自然生命的・身心的及び勞働的・理性的なる存在次元を必然的に經過せざるを得ない以上、自己の抽象疎外への墮落の可能性は自己の本質そのものが中に内具されて居ると言はねばならぬ。同様に又國家の眞實態の建設が、それ自體に於いては抽象疎外態と言ふ外なき共同體と結合社會との事實的基底を必須不可缺の前提とする以上、國家の抽象疎外態への墮落の可能性は國家の本質そのものに内屬すると言はねばならぬ。

存在即當爲的自己に疎外墮落の可能性が必然に内具されて居るのは、自己の發達育成がそれ自體に於いては抽象疎外的なる低次の存在次元を經過せざるを得ないといふ事實に基くものであつた。然してこの事實は、自己が發達完成せる精神的人格の主體として初めから實存するのではなくて、却つて自然的生命より自然的存在として生誕せざるを

得ぬ、と言ふ事實に究極的には由來するであらう。所が生誕は死亡を豫想し、生誕と死亡とは相俟つて人間の有限性を顯示する。こゝに我々は自己に必然的なる疎外頽落の可能性は結局は人間の本質的なる有限性に根據する事を自覺せざるを得ない。人間の有限性の客觀的現れと言ふ可き生誕が、抽象疎外的なる自然的生命よりの生誕でなければならぬ、と言ふ事が疎外頽落の可能性を人間に必然的たらしめるのである。次に事實即理想的國家に疎外頽落の可能が不可避免的に内屬するのは、國家の建設がそれ自體に於いては抽象疎外的なる共同體及び結合社會を基底とせざるを得ぬといふ事實に基くものであつた。この事實は、國家が超時間的成態として存在するものではなくして、却つて空間的基礎的に制約せられ又時間的發展の法則に規制される、と言ふ事實に究極的には由來するであらう。所が空間的時間的制約規制は國家の社會性Ⅱ歴史性の客觀的現れと言ふ可きものである。従つて我々は國家に必然的なる疎外頽落の可能性は結局は國家の不可避的社會性Ⅱ歴史性に根據する事を自覺せざるを得ない。共同體及び結合社會の存立發展に客觀化される國家の社會性Ⅱ歴史性が、かゝる單なる社會存在への國家の疎外頽落の可能性を國家に必然ならしめるのである。而して抽象疎外的社會存在への頽落を不斷に絶對否定する建設實踐に於いて、國家の眞實態は建設創造されるであらう。所が國家は本來多數の個人の組織體として、多數の個人をその構成建設成員とするものなるが故に、國家の眞實態は究極的には全成員が國家的實存に向上し相互に精神的人格的に關係交渉し得る状態であると言はねばならぬ。國家の眞實態を特に成員の國家實存的組織として把握する時、國家と同じく存在即當爲的・事實即理想的であり疎外頽落の可能性を必然的に内具すると考へられた自己が、この可能性を絶對否定して實存に發達向上するといふ事が、國家の眞實態の建設と内面的本質的に聯關する事を我々は自覺せざるを得ない。國家の眞實態の建設—自己

の實存への向上を客觀即主體的に把握すれば、要するに自己即國家・國家即自己の聯關の充實實現に外ならない。而もこの自己即國家は單なる當爲、理想ではなくして同時に即存在・事實なる事は、國家建設の事實基底たる共同體と結合社會とが、自己の發達育成の過程としての存在次元たる自然生命的・身心的及び勞働的・理性的次元と夫々本質必然的に聯關する、と言ふ事實よりして明瞭であると思ふ。とまれ國家の眞實態を特に成員の國家實存的組織として把握し、從つてこれが建設を成員自己——國家は多數の個人を成員とするが故に——成員諸個人の發達向上育成陶冶との内面的本質的聯關に於いて捉へる時、我々は教育が國家の眞實態の建設に於いて内面的本質的契機をなす事を自覺せざるを得ない。而して國家の眞實態の當爲的建設は、繰返し述べた如く國家の事實基底の存在的發展と相即するが故に、教育は國家の單なる當爲的眞實態の建設に於いて主體的行爲的契機として實踐されるのみならず、同時に常に國家の事實的基底の存在的發展に於ける客觀的事實契機として生起するのである。自己の存在次元に於ける自らなる發達向上・國家の事實基底に於ける存在的發展との相即聯關に於いてはなければ、自己の實存性への育成陶冶・國家の眞實態への創造建設が具體的に遂行され得ざる事と同じく、客觀的事實的生起としての教育との相即聯關に於いてのみ教育の主體的行爲的實踐は具體的に遂行され能うのである。教育も亦存在即當爲的であり事實即理想的なりと言はねばならぬ。

國家的現實は上述の如く社會的・歴史的であり、夫々勝れて絶對の倫理的現成基底であり又生命の發展進歩の基底である共同體と結合社會とをその事實的基底となし、之等兩者に於いて夫々勝れて絶對の特殊なる社會的人倫として現成し・生命は特定の歴史的成體として自己を形成して居る。絶對に對し相反疎外的なる面を持つ自然的生命より生

れる有限なる人間が、それ自體に於いて直ちに社會的人倫の充全なる成員たり得ざる事は當然である。同時に又已に歴史的に發展進歩せる生命に對しては抽象的と言ふ可き自然的生命より生まれる有限なる人間が、それ自體に於いて直ちに生命の歴史的形成體の充全なる擔手たり得ざるは必然である。而も絶對—生命は人間のかゝる單なる抽象疎外態に於ける止住停滯を許さない。勝義には絶對の最高段階に於いて發動する攝取意志は、共同體の社會的人倫に於いても、之れが完全なる成員たらざる疎外的人間へ攝取せんとするであらうし、又勝義には生命の最低次元たる自然的生命に於いて機能する同化作用は、結合社會の歴史的成體に於いても、之れが充全なる擔手ならざる抽象的人間を結合社會的成體に同化せんとするであらうと、我々は夫々比論的に言ふ事が出来るのではないか。ここに我々は國家的現實の客觀的事實なる生起としての教育機能を見るのである。而してこの教育機能が國家の特に社會存在的なる事實基底に於いて生起するものなる事も上述より明瞭であらう。然しかゝる客觀的事實的生起としての教育機能がそれ自體に於いては、絶對の低次なる（即ち即自的）攝取及び生命の高次なる（即ち對自的）同化を共に充全且つ具體的に遂行し得ざる事も、實は客觀的事實に徴して疑を容れない。又假令この攝取・同化を充全に遂行し得たとしても、猶絶對—生命の呼應即相反的なる聯關の本性上、共同體の社會的人倫と結合社會の歴史的成體とが、呼應すると共に又相反矛盾し否定對立し以て絶對媒介的聯關を形成し得ざる事は已に述べた通りである。斯の如く生起としての教育機能はそれ自體に於いて完結たり得ずして、却つてその都度一定の完結に達すると同時に必然に自己分裂を惹起し従つて自己否定に陥らざるを得ない。客觀的事實的教育機能の自己否定を更に否定して絶對否定的に遂行實踐されるのが、即ち主體的行爲的なる教育活動に外ならない。教育機能のかゝる意味の絶對否定に於いて實踐

されるものたる以上、教育活動の遂行の本來的地盤は最早國家の單なる社會存在的事實基底ではなくして、同時にこれが國家の當爲的眞實態との相即に於いて自覺・建設される勝義の國家的現實なる事は言ふ迄もなく明白である。教育活動は客觀的事實的なる教育機能を基底とし、これがそれ自體に完全に遂行し得ざる、抽象疎外的人間の社會的人倫への（即自的）攝取と・歴史的形成體への（對自的）同化とを、絶對—生命の絶對媒介態たる國家の眞實態に立ちつゝ、充全且つ絶對媒介的に遂行せんとするものである。而して絶對—生命の絶對媒介を自覺しこれを國家眞實態の建設に於いて遂行するのは、最早單なる社會存在ではなくして、却つてこれに否定的に對立し得る個的主體的自己でなければならぬ。この個的主體的自己が正に教育活動の個的自覺の主體に外ならず、この故に教育活動は主體的行爲的として客觀的事實的教育機能と區別されるのである。兩者の區別を更に別の觀點より見れば、教育機能は、社會存在と個體との間に（即自的）攝取・（對自的）同化の單に客觀的事實的なる聯關交渉として生起するものであるに對し、教育活動は、社會存在に否定的に對立し得る個的主體的自己の自覺的成立と共に自己に否定的に對立し得る諸他成員が對自化せられるが故に、社會存在と個體との單なる客觀的事實的交渉聯關に止らず、更に之れとの否定的媒介に於いて自己と他者との間主體的なる指導・育成・陶冶・（對自的）攝取の關係として主體的行爲的に實踐せられるものである。要するに教育は常に兩面を持ち、一面では客觀的事實的なる教育機能であり、他面では主體的行爲的なる教育活動であつて、正に斯の如き存在即當爲的なる二重的者として國家的現實の本質的構造即建設契機をなす。教育が斯の如く國家的現實の本質的契機たる事を驪せば、直ちに國家的現實が教育的である事、少くも教育的側面をその本質的側面とする事、従つて又國家的現實に於いて教育的現實と言ふ可きものがその本質的一面として必然に成立す

る事を、我々は洞察し得るのである。教育は國家的現實の構成即建設契機なるが故に、教育的現實たる一面を持つ事なしに國家的現實は具體的に存立し得ないのである。

以上我々は國家的現實に於いて教育的現實がその本質的一側面として必然的に成立する事を、言はゞ國家的現實の方より論考し來つたのであるが、更に進んで我々は教育的現實の内部の構造を立ち入つて考察しその構造契機に分析して、以てこれが本質を完全に解明把握せねばならぬ。(一)上に論考せる如く、人間個體が、絶對の現成たる人倫に對しては疎外的であり歴史的形體に對しては抽象的である自然的生命より生まれる所の、有限者なるが故に、人間は共同體の社會的人倫の充全なる成員でなく、結合社會の歴史的形體の充全なる擔手でなく、從つて又同時に絶對生命の絶對媒介態たる國家の充全且つ具體的建設創造の主體たり得ず、却つてこれのために短からぬ發達・育成の過程を経過せねばならぬ、といふ事實即當爲と呼應相關的に國家の教育的現實は成立するものであつた。即ち人間個體の發達・育成といふ事が教育的現實の本質的なる内質をなすと言はねばならぬ。若し人間が有限なる抽象疎外的なるものでなく、初めより共同體の社會的人倫及び結合社會の歴史的形體の充全且つ完全なる成員であり擔手であり、同時に又國家的現實の充全且つ具體的建設主體であるならば、人間個體の發達・育成す可き餘地はなく、教育が生起し又遂行される謂なきが故に、教育的現實が成立せざるを得ない事實即當爲的なる必然性は存立しないであらう。要するに人間の抽象疎外的有限性が教育從つて又教育的現實の成立す可き事實即當爲の根據をなすと言ふ事が出来る。而してこの抽象疎外的に有限的であり從つて教育的現實の樞軸的契機と言ふ可き、發達し育成される個體が、正に教育の客體即ち被教育者である。(二)然しこの個體の發達・育成は個體の單に内在的直線的なる成長發育ではな

い。個體は現實の自然的生命より生まれ・共同體の社會的人倫に於いて生活し・結合社會の歴史的形成體に於いて勞働する所の、本來的原始的に社會的Ⅱ歴史的存在者である。個體は正にかゝる社會的Ⅱ歴史的存在者として、即ち歴史的社會存在に於いて發達し育成されるのである。さればその發達・育成は、一面個體の内部からの自然生命的なる成長發育たる事は言ふ迄もないが、これに止まらず同時に更に歴史的社會存在に媒介されこれに規定影響される所の、内即外的・主體即客觀的なる發達・育成であると言はねばならぬ。歴史的社會存在を離れて我々は人間の具體的現實的發達・育成を考へる事も出来ない。個體の個性と言ふ如きものも、一面自然生命的所與としての素質に基礎付けられるでもあらうが、これの具體的形成は常に歴史的社會存在との生活的・勞働的聯關に於いて初めて遂行される事を注意せねばならぬ。國家的現實の事實基礎と言ふ可き歴史的社會存在は、斯の如く人間の發達・育成に對する影響規定に於いて、教育的現實の教育性を分有し、特に屢々その客觀的事實的生起としての教育機能の主體となる。要するに國家的現實の事實基礎の社會性Ⅱ歴史性が、教育従つて又教育的現實の成立す可き勝れて客觀的なる根據をなすと言ふ事が出来る。かゝる意義を荷ふものとしての歴史的社會存在を特に擧揚する事が、教育の現實性を確保する上に重要な意味を持つ所以を注意する事は、教育が猶未だ屢々抽象的主觀的に觀念される今日特に必要である。(三)然し同時に歴史的社會存在が、その共同體的次元に於いて即自的なる人倫社會であり・結合社會的次元に於いて對自的なる歴史的生命形成體であつて、未だ絶對—生命の即且對自的なる絶對媒介を實現するに到らず、従つてこれが成員擔手たる個人も亦かゝる絶對媒介の個的主體として國家の充全なる建設創造の主體には未だ達せざる事を、我々は看過してはならない。かゝる絶對媒介の主體として人間の本來性を實現し得るためには、個體は歴史的社會存

在と及びこれに於ける生活・勞働を通じて發達し育成されるであらう社會性Ⅱ歴史性にと對し、否定的に對立し得る所の自律的なる個的主體でなければならぬ。所が個體の發達・育成を客觀的事實的に媒介し導き促す所の歴史的社会存在は、個體の社會性歴史性を擴充してその有機的一肢體として攝取・同化する事を本性とするものであつて、絶對媒介的なる個的主體性は却つてこれを制限抑壓するものである。個體をして個的主體性を伸長發揮せしめるものは、歴史的社会存在ではなくて、却つてこれに於いて直接に呼應即相反の聯關に於いて止まる絶對—生命を、國家の建設に於いて即且對自的に絶對媒介せんとする個的主體的个人でなければならぬ。同類のものが同類のものに對應し、同種のもものが同種のもものを教育すると言ふ事が現實の本質である。自律的實在主體を育成陶冶するものは同じく自律的實在主體でなければならぬ。この實在的主體が即ち教育の個的主體即ち教育者に外ならない。教育者は有限なる個體の自然的なる成長發達と・これに對する歴史的社会存在の制約影響とを事實的基底としつゝ、同時に又社會性Ⅱ歴史性との聯關に於いて個體の個性を共感・洞察して、以て個體の社會的Ⅱ歴史的たると共に内面的Ⅱ個性的なる發達向上を促進指導し、更にその個的主體性を育成陶冶する事に、その本來的使命を見出すものである。他方より見れば教育者は、現實の社會的Ⅱ歴史的なる事實基底と有限なる個體との間の客觀的事實的なる生起としての教育機能的聯關を、この個體と自己との間主體的なる教育活動的關係に否定的に轉化し、同時に教育活動を教育機能との絶對媒介的相即に於いて遂行せんとすると言ふ事が出来る。而して教育者と被教育者との間主體的なる教育活動的聯關は、人間的現實の階層的構造に對應して成立するのであらう交渉の普遍的紐帶と言ふ可き、共同體的人倫の生活形式・結合社会的形成體の勞働形式及び文化形式・及び國家的現實に於いて即且對自的に實現される絶對無即絶對生命

を媒介として、影響同化・傳達教授・攝取傳燈と言ふ如き様々の形態様式に於いて成立つものであり、一舉にその本質を開明する事は困難である。とまれ勝義の教育は、教育者と被教育者との間に於いて遂行される促進指導育成陶冶の間主體的實踐に外ならない。要するに個體の有限性と現實の社會性 \parallel 歴史性に夫々成立の主體的及び客觀的根據を持つ所の教育的現實は、兩者を個的主體的に媒介する所の教育者に由る教育活動の實踐を俟つて、初めてその内實を客觀即主體的乃至即且對目的に充實完成すると言はねばならぬ。

要するに教育的現實は、成長發達し育成陶冶される所の有限なる個體即ち被教育者と・この被教育者の發達向上を媒介し促し導く歴史的社會存在と・更に被教育者の發達向上をこれに對する歴史的社會存在の制約影響を基底としつつ促進指導し同時にその個的主體性を育成陶冶する教育者とを、その必須不可缺の構成契機となし、三者の中孰れか一者を缺くも充實せる具體性を以て存在即建設される事が出来ない。即ち先づ被教育者の契機を缺いて教育的現實の成立する謂なき事明白にして疑を容れぬ。教育的と言ふ概念の内包を高度に抽象しその外延を極度に擴大しても、猶被教育者の發達變化と言ふ事丈は抽象され得ざる最後の契機をなす。被教育者なき教育現象は全く無意味の空語に外ならない。次に社會的歴史的事實基底に媒介される事なき被教育と教育者との教育關係は、實は現實より疎外せられたる・或は現實とは無縁なる従つて最早教育的現實を構成即建設するとは言ひ難い、抽象的非現實的なる個人的教育關係に過ぎないと言はねばならぬ。成程教育關係が高度に精神的・人格的なる攝取傳燈的聯關に迄高まる時、却つて歴史的社會存在を否定的に超越する面を持つ事は必然であるが、これも實は初めからこの事實的基底を游離して端的に精神的・人格的交渉關係として遂行されるのではなく・又實は遂行さる可きでなくて、却つて歴史的社會存在に於

ける事實的基底的なる教育機能的交渉關係の絶對否定に於いて實踐されるものなる事を注意せねばならぬ。かゝる現實的聯關を十分に注意せず、端的に個人的教育關係より出發してこれを考察の中心軸として、教育一般を・私から見れば主觀的に・把握せんとするのが所謂「教育學」(Pädagogik)である。教育學の學徒は恐らくかゝる超越批判に對し不満を表明するであらうが、少くも原語の意味に忠實ならんとする限り、教育學を以て教育者による若き者即被教育者の導きの目的と方法とに關する學と規定せざるを得ないであらう。勿論その導きが客觀精神を媒介し且つその傳達といふ形式に於いて行はれるが故に、教育學に於いては教育は一般に教育者と被教育者との間の客觀精神傳達の關係として規定されるのが普通である。成程兩者の間の傳達的交渉聯關が前教育的なる同化や超教育的なる傳燈に對しては本來的に教育的なるものたる事は否定出來ないが、單にかゝる觀點のみから教育全體の本質を規定する事は抽象的たるを免れないのではないか。教育學が今日教育の社會的現實性を重視する人々に由つて激しい批判の對象にされて居るのは實は故なき事ではないのである。我々は教育學そのものゝ立場に止まる事が出來ない。さて最後に教育活動の個的主體たる教育者の契機を缺く時、假令社會的物としての客觀的事實的なる教育事實乃至教育現象は實在し得ても、それは行爲の主體性に媒介された充實せる教育的現實とは言ひ難きものである。已に屢々述べ來つた如く歴史的社會存在の教育的機能性は無視する事が出來ず、これの客觀的事實的なる基體的媒介に即して初めて眞實の教育活動も遂行されるものであるけれども、歴史的社會存在を直ちに教育の主體となし、その教育的機能性を以て一般に教育の本質を解明記述せんとする事は、教育の主體性を度外視乃至輕視するものとして具體的なる教育論と言ふ事が出來ない。所謂「教育科學」(Erziehungswissenschaft)は多少ともかゝる抽象を犯して居るのではないか。教

育科學が教育の客觀的社會性を重視して主觀的個人的なる教育學の抽象を補つた事は、その注目す可き功績と言はねばならぬが、同時に亦教育學とは反對の抽象を犯して居る事も否定出来ない。特に教育科學が基體を重視するフランス社會學でなく基體無視の形式社會學をその基礎學とするに及んでその抽象性は益々蔽ふ可からざるものとなる。要するに被教育者・歴史的社會存在・教育者は國家的現實に於いて相互媒介的聯關をなし、正にかゝる聯關に於いて教育的現實を構成即建設するのである。この教育的現實を客觀即主體的に充全に把握せんとするのが「教育的現實の學」に外ならないのであり、我々の企圖する「教育哲學」(Erziehungsphilosophie)はこれを樞軸的第一部門とするものであり、同時に又抽象の一面的なる教育學と教育科學とを綜合するものであらう事を期待するものに外ならない。少くも斯の如き内容を持つ教育哲學の確立される事が、今日教育の學的研究に於いて特に要望されて居るのではないか。或る者は教育學の個人的主觀的立場を原理的に脱し得ず・或る者は單に社會的客觀的に即ち教育科學的方向付けられながら、教育哲學を主張しつゝあるのが現状である。然し眞實の教育哲學は、かゝる態度的・方法的・一面性偏倚性を斷然捨離して、端的に教育的現實から出發し・これを超越的即根源的反省自覺に於いて哲學的に組織建設する時、初めて眞にその名にふさはしき内容を以て組織されると私は確信せざるを得ない。この論文も未熟ながらかゝる確信の具體的實行としての一試論に外ならない。

以上我々は教育的現實が國家的現實に於いてこれの本質的一側面として成立即建設される事を追跡論考すると共に、他方それ自身に於ける內的構造を分析解明した。さて當然の事であるが、教育的現實の内部的構造契機たる被教育者及び教育者は共に國家的現實の主體的構成即建設契機であり・歴史的社會存在は國家的現實の事實基底的構成契機

に外ならない。されば教育的現實の國家的現實に於ける位置付けと・その內的構造の分析とは、本來相即す可きものたる事明白である。右には思考的操作上位置付けと構造分析とを分離して遂行したのであるが、これは單に操作の便宜といふのみに止まらず、教育的現實に關する論考の即自及び對自の段階の區別と考ふる事も出來なくはない。今我々は再び兩者をその具體相に於いて即ち即且對自的に相即媒介する時、現實に於ける教育の具體的本質・及び現實の教育的構造の本來の意味を完全に把握し得るであらう。具體の本來的教育とは、相反即呼應的なる絶對——生命の媒介態たる國家が、その抽象疎外的事實基底として夫々絶對の即自的なる人倫的現成たる共同體と・生命の對自的なる社會的——歴史的形成體たる結合社會と（即ち歴史の社會存在）を、——之等の即自的乃至對自的なる成員乃至擔手であり従つて亦絶對——生命の絶對媒介態に對して抽象疎外的である有限なる人間個體（即ち被教育者）の、國家建設的なる絶對媒介的個的主體（即ち教育者）の指導陶冶による、具體的發達向上に基く絶對媒介的創造建設の實踐を通じて、——即且對自的に絶對媒介して、以て自身を社會的——歴史の即眞實の國家に建設即向上せんとする本質意志の間個體的なる指導陶冶的實踐に於ける發現に外ならない。こゝにその本質を述べた教育は、その全體的主體と言ふ可きものが國家なるが故に、當然國民教育と言はる可きものである。その全體的主體が國家であるこの國民教育が現實に於いて最も著しい教育的作用性を發揮して居るのみならず、更に原理的本質的に觀て教育の最も具體的なる典型である、と言ふのが私の確信であり、諸他教育の類型は孰れも國民教育の抽象疎外的一面として考へる事が出来るのではないか。私見に由れば、共同體的教育（その典型が家庭教育）・結合社會的教育（一般に社會教育と言はれる教育）・及び人類的教育の三者が、最も顯著なる教育類型であるが、之等が國民教育の抽象疎外の一契機をなす事は

上述の論考よりして明白であらうと思ふ。とまれ私の企圖する教育哲學は先づ、國民教育がその教育の最も具體的典型たる教育的現實を主體即客觀的に自覺解明し、更にこれが新たな創造建設を企劃指導せんとする學たらんとするものである。

さて教育哲學が教育的現實の構造を完全に自覺解明し、これが創造建設を企劃指導し得るためには、教育的現實の右に分析した如き本質的三特性に適應し得る如き具體的立場に立脚せねばならぬであらう。所がこの三特性の分析解明に際し我々が立脚した絶對—生命の哲學の立場が、同時に又この三特性に適應し得る教育哲學の立場に外ならないと私は確信する。立脚す可き立場の條件の分析解明に於いて、已にこの立脚す可きであらう立場に立脚して居るといふ循環を私は犯して居る。然し私は循環を無自覺的に犯したのではなくて、循環の免れ難きを自覺し、免れ難ざる循環を直接的抽象的段階より媒介的具體的段階へと漸次具體化し來つたのであり、こゝに論述しつゝある論文も實はこの具體化の一段階に於いて展開されつゝあるものに外ならないのである。とまれ教育哲學が立脚す可き立場の充す可き、而して實は已に充されて居る所の、三條件を對自化しおく事は免れ難き循環事態を多少とも明確化するでもあらう。

(一) 教育的現實は已に述べた如く發達し育成される人間個體を樞軸的な契機とするものであつた。従つて當然個體の發達・育成の充全なる把握といふ事が、教育哲學の立場が充す可き第一條件である。教育の客體即ち被教育者は、飽迄未完成の狀態に少くも原理上止まつて居る所の個體としてゞもなく、又初めから完成の狀態にある個的主體的實存としてゞもなく、正に未完成の狀態から完成の狀態へと發展的・向上的に發達し育成される全過程として捉へられ

ねばならぬ。従つて人間の個的主體的實存としての完成態を絶対に自覺論考し得ざる生物學的及び心理學的に方向付けられたる立場、及び人間を初めから完成的既成的と考へ従つて未完成の状態を原理上完全には把握し得ざる理性主義的乃至抽象的實存主義的に方向付けられたる立場、の兩者孰れにも教育哲學は立脚する事が出来ない。人間の自然生命的・身心的なる事實基礎的在方の觀察記述にのみ踰越して、かゝる事實基礎の絶対否定に於いて發展即實現される眞實態の自覺把握を無視する事は出来ない。逆に又人間の完成態が端的に實現され又そのみが人間の本質的在方であり未完成態は單に偶然的な在方にすぎずと考へ、完成態は却つて未完成態を事實基礎となしこれの絶対否定に於いて發展即實現せられ、従つて未完成態も完成態の事實基礎的契機として止揚保存され以て眞實態の不可缺契機たる事を、無視する時教育哲學は具體性を以て存立する事が出来ない。當爲理想的完成態も事實基礎的未完成態も共に人間の本質的在方であり、兩者は絶対媒介的聯關に於いて人間の眞實態を構成即實現するであらう事は、存在即當受的・事實即理想的なる人間存在の本質そのものよりして當然と言はねばならぬ。而も未完成態より完成態への發展的向上的なる發達・育成は單に連続的なるではなくて、常に何等かの程度斷絶を媒介にせる連続即非連続的なるものである。個的主體性の覺醒伸長が比較的微弱なる未發育・未成育の段階に於いては、自己の未完成態を積極的自覺的に否定して飛躍的に發展向上する事が比較的少く、従つて當然その發達育成に於いては連續性が強大であつて、非連続性が對目的に顯現する事が少いと言はねばならぬ。然しかゝる段階に於いても全く發展向上の非連續性がないのではなくて、或る特定時期に飛躍的發展向上が明確に指摘されないと云ふに止まるのであつて、人間の長き發達育成の全過程を通觀する時、その前後に於いて相互に質的に區別する外ない顯著なる特性が指摘される事は否定出來ぬ事實で

はないか。況んや人間がその發達・育成の精神的・人格的次元を實現媒介するに到り、事實基底的社會存在を絕對否定し眞實の國家建設の絕對媒介を行ずる時、こゝに非連続的發展・飛躍的向上の遂行される事は疑ひなき事である。

要するに教育哲學は人間個體の未完成態から完成態への連続即非連続的なる發達・育成の全過程を自覺論考し得る立場に立脚せねばならぬ。所が相反即呼應的なる絕對—生命の聯關葛藤の疎外即媒介的なる運動として人間的 \parallel 國家的現實を自覺把握せんとする我々の立場こそ、正にこの要求條件を最も完全に充足し得ると私は確信せざるを得ない。本論の論述は未熟ながらこの確信の具體的展開に外ならない。

(二) 次に個體の發達・育成は單に内在的直線的なる成長發育ではなくして、個體がそこに於いて生活し勞働する人倫的 \parallel 歴史的社會存在により影響規定される主體即客觀的發展向上であつた。人間は初め獨立なる個體乃至個人であり或る恣意的偶然的なる仕方機縁により社會に入り込み、入り込んだが故にその發達・育成を社會より止む事を得ず媒介制約され、或は促進され或は阻害されるのであり、促進される限り社會の構成主體たる事が望ましく・阻害される時は社會より脱却し得ると言ふ如きものではない。人間は、絕對に對し相反即呼應的なる聯關葛藤にあり従つて自己矛盾的なる生命より生まれ、而も生命のかゝる自己矛盾に基く疎外即媒介的なる運動に於ける夫々人倫的及び社會的 \parallel 歴史的なる自己形成體たる共同體及び結合社會の成員乃至摺手として、發達し育成されざるを得ない所の本質的に人倫的・社會的 \parallel 歴史的存在者に外ならないのである。歴史的社會存在の客觀的構成の中には何等かの仕方形に於いて人間の主體的行爲が入り込み、従つてそれは常に何等かの程度に於いて而も本質的に人間の所業たる意味を持ち、逆に又人間の主體的構造は常に歴史的社會存在の客觀的構成に呼應し、従つてそれは常に何等かの意味に於いて社會の

主體的映像なのである。即ち社會と人間とは相互にその内面的構成に迄て貫入滲透し合つて居るのであり、一方を缺けば他方は崩壊し他方を失へば一方は壊滅するといふ、本質的な相即聯關を形作つて居るのである。かゝるものとして人間は社會を把握し得る事が教育哲學の立場の充す可き第一の要件である。所が我々の立脚する絶対—生命の哲學は、絶対—生命の呼應即相反的聯關葛藤の疎外即媒介的運動の内面的構造を、右に述べた如き本質的相即聯關として開展するが故に、この要件を充す可き具體的立場なりと私はひそかに確信するのである。本論に於いてこの直接の確信は或る程度の基礎付けをなされるであらう。

(三) 最後に、教育は單なる生起としての客觀的事實的教育機能たるに止まらず、主體的なる人間と人間との關係に於いて遂行される教育活動として主體的に行爲化される時、初めて充實せる教育として完成されるものであつた。勝義の教育は主體的人間個人の間遂行される促進指導育成陶冶の實踐的交渉關係である。換言すれば充實せる教育活動は、その主體も客體も即ち教育者も被教育者も共に主體的人間であり、従つてそれは主體的主體と客體的客體との間に行ぜられる特定の人間—人格關係なのである。教育を人と物との關係と考へる人は恐らくないであらう。然し Billung や陶冶等の言葉の解釋學的考察に示唆せられて、物に對する人の制作行爲を典型として、人と人との關係たる教育關係の構造本質を逆に理解把握せんとする傾向を、我々は未だ猶屢々見るのである。教育關係は然し人と物との關係の比論に由つては絶対にその本質を充全に捉へられない事を銘記せねばならぬ。人と物との關係を如何に具體化し複雑化するも、又物から一步前進して自發性を内具する生物の如きものを客體として考へても、それは飽く迄栽培・飼育に止まつて人間—人格關係たる教育關係ではあり得ない。教育關係を具體的且つ充全に把握せんとすれば、

人と物との關係を考察する立場を斷然去らねばならぬのみならず、更に個人と社會との直接なる關係を考察する立場にも我々は止まる事が出来ない。この關係に於いては客觀的事實的生起としての教育機能的關係は考察記述されても、教育活動的關係は自覺把握されないものである。教育活動の人間⇨人格關係を完全に自覺把握する事が教育哲學に要求される第三の條件である。所が人間の現實を絕對—生命の葛藤聯關の運動として捉へ、絕對の生命基底への具體的現成の方向に人間⇨人格關係たる人倫を考察せんとする我々の哲學的立場は、正にこの教育關係を自覺把握し得る具體的立場なりと私は確信せざるを得ない。

〔二〕 自然 的 生 命

絕對は自體的に存立するものではない。自體的に存立する限りそれは絕對たる性格を失ひ相對に轉落する。従つて絕對は直接に自己を顯示するものでない。直接的自己顯示は顯示するものゝ自體存在を豫想するが故である。絕對は絕對媒介的行爲に於てのみ現成する。絕對媒介は然し即自的 direct 態を豫想し之れが絕對否定的媒介行爲に於いて行ぜられるものでなければならぬ。然らざれば媒介それ自體が直接化され絕對性を失つて相對に轉落するであらう。而して絕對媒介が豫想し之れを絕對否定的に媒介する即自的 direct 態が即ち生命である。逆に言へば生命は、絕對がその絕對媒介性を失つて直接態に轉落せるものであり、絕對の自己疎外態に外ならない。その疎外性に着目する時、生命は絕對の否定態であり實體的・基體的である。然し生命は絕對の絕對的自己疎外態でなくして實はその即自的 direct 態である。若し絕對的疎外態であるとすれば、絕對の絕對媒介性がそこに及ばず従つて媒介性はその絕對性を失はざる

を得ないが故である。生命が絶対の即自的直接態たる面に着目すれば、生命は絶対の單なる否定態として質體的・具體的たるのみならず、同時に主體性を即自的に内藏し絶対實現の積極的活動性を具有して居る。生命は絶対に對し斯くの如く二重の關係に立ち、一方に於て疎外對立的であると共に同時に他方呼應聯關的であり、この二重關係との相關に於いて生命は自己矛盾の構造を持つ。生命はこの自己矛盾の構造の故に生成發展するのであり、而も生成發展の極却つてこの自己矛盾が激化されて生命が自己分裂に陥り、その生成發展が阻害抑壓される時、絶対媒介的實踐に於いてこの阻害抑壓の否定を更に否定して、生命の生成發展を却つて自己の創造的行動の媒介に轉する個的主體に由つて絶対は現實に實現されるのである。然し生命の絶対に對する相反即呼應的なる二重關係とこれに相即して生命の自己矛盾的構造を自覺し、絶対實現の絶対媒介的行動を遂行する個的主體は、實は單に生命的なる存在者ではなくして、已に身心的次元を通過し生活・勞働の經驗を媒介し理性的・精神的次元を拓き人格的實存に發達向上せる人間である。

然し人間は初めからかゝる高次の人間として完成せる個的主體としてあるのではなく、實は却つて漸次的發達育成の結果かゝる高次の人間に高まつたのである。即ち初め彼は極めて低次の直接的即自的存在者であつた。高次の人間となる迄には自らなる成長發達があつたであらうし、又人爲的育成陶冶がなされたであらう。然し人間はその生存の端緒に於いては何等の育成陶冶も受けず、又言ふに足る程の成長發達を遂げては居なかつたのである。人間存在のかかる直接的端緒をなすものが即ち生誕である。人間は理性的存在者として或は精神的主體として或は人格的實存として生まれたのではなくて、實は單なる生命的存在者として生れたにすぎない。さて生命的存在者は理性的・精神的・

人格的なる存在者・主體・實在等と異つて、何等の發達・育成なしにそのままにして生命的存在者たり得る限り、人間存在の最も直接的在方に於ける存在者なりと云ふ事が出来る。従つて又生命的存在者たるためには自覺的個體性に由る何等の媒介的活働も要求されず、單に生まれる事を以て足りるのである。即ち理性的・精神的・人格的たる事なしに生命的存在者たり得るのであり、而もその逆は絶對に不可能である、と言ふ意味に於いて、生命存在性は人間存在の最も基底的なる在方なりと言ふ事が出来る。而もこの生命存在性の直接性・基底性は一般に、生命的存在迄には自覺的個體性に由る媒介活動が及ばず、却つてこれが根源的基底たる事を意味するが故に、生命存在性は更に自覺的個體性・個體的活動性以前である事即ち前個體的なる事明かである。この前個體性のかの直接性・基底性の根底をなすと言ふ事を得るが故に、前個體性が生命の中核的屬性をなすと言ふも過言でない。所が生命の前個體性は生命が人間個體を生む根源であるといふ事實に於いて端的に顯示される。この事實に正に生命が絶對の單なる疎外態でなくして實は同時に絶對の即自的直接態なる所以が存するのであり、この點に於いて生命は即自的絶對と呼應する。要するに我々は個體の生命存在性の面を追跡する事によつて、かゝる個體を生む根源としての生命が絶對の即自的直接態たる所以を知るのである。所がその即自的直接態に於け絶對は、正にその故を以て普遍的・類的たるを得ずして特殊・種的たらざるを得ない。こゝに生命が具體的には普遍的・類的生命でなくして特殊の種生命たる所以がある。即ち實在するのは種生命である。

然し生命は單に個體を生むのみでなくして同様に自ら生成發展する基體的實在である。生成發展性は生命の中核的本質であり、こゝに絶對の單なる疎外態たる物質と根本的に異なる生命の特質がある。この生成發展する生命こそ現

實のあらゆる現象・存在の基底をなすものであり、一切の現象存在は生命の自己形成の所産なりと言ふ事が出来るであらう。然しそれ等は一舉にして同様の原理的法式に由つて産出されるものではない。實は存在の各次元に於いてその方式は夫々異なるものなる事を注意せねばならない。生命は單一的流れではなくして、却つて各次元に於いてその自己形成の方式を異にする複雑多岐なる基體的實在である。こゝには先づ生命の單なる生命的次元即ち未だ身心的以上の次元に高まらざる生命の生成發展の方式を概観せんとする。然し生命はそれ自身に於いて直接に生成發展するのではなく、それにより生まれたる生命的個體の行動を媒介としつゝ生成發展するであらう。生命的個體は環境に於いて而も環境に順應し又之れを同化する事に於いてのみ生きる事が出来る。即ち環境の刺激に對し之れに適應し反應する事に由つて環境の變化一般に順應し、又環境に對する特定の能動的働きかけを通じて之れを受容同化する事に於いてその生存を保持し發展せしめる。かくの如く環境に對する個體の順應同化の作用は、個體のはたらしきを通じて遂行されるものであるけれども、實は個體の自覺せる從つて又自由なる撰擇・行動に由るものではなくして、却つて個體と環境との前個體的なる對應の聯關に於て自ら行はれるものに外ならない。この對應聯關は個體が任意に撰擇するものでもなく又環境が必然的に決定するものでもなく、實は前個體的構造聯關として存するものである。個體はこの構造聯關に於いてのみ或はこの構造聯關の自己限定の一肢體としてのみ、よく環境に順應し又之れを同化し以てその生命を維持し發展せしめる。從つて個體が任意に又自由にこの構造聯關に入り込むのではなく、生まれた個體は已に必然的にこの構造聯關に於いて生きるのである。されば生命的個體は自らの意志を用ふる事なく又特定の知性を媒介する事なく、自ら生きて行く事が出来るのである。生命的個體をして自らなる生存を保たしめ、その成長發達を支える

のが、正にかの構造聯關を自らの構造とする所の種的生命に外ならない。而も種的生命は個體の生存を保持しその成長發達を支持しつゝ、個體の生存や成長發達を通じて自ら生成し發展するのである。要するに種的生命の最低次元に於ける生成發展は先づ環境に對する順應同化の行動として實現される。而して人間存在の根源的契機をなす生命的基底が、正に右の如き種的生命の自己限定態に外ならない。即ち人間個體はその生存の根源を又その成長發達の根底を、種的生命により支持され支撐されて居るのである。換言すれば生命的基底は一應個體の内部に所謂内的自然としてあるものでありながら、種的生命の自己限定態として、同時に環境との對應關係に於いて成立ち従つて外的自然と本質必然的に聯關するものである。生命的基底には純粹なる内もなければ全き外もない。内と外とは本質的に融即し、内的自然と外的自然とは相互に滲透し、この融即滲透に於いて初めて生命的基底は存立し得るであらう。斯の如く人間はその直接の生命的次元に於いては、外的自然から全く獨立した純粹に對自的内的なる個體として存立するのではなく、外的自然環境と融即滲透し合ひ之れと本質必然的に聯關するものである。この限り人間は種的生命的構造聯關の有機的構造肢體であり、これ以外に於いて生存する事が出来ない。即ち生命存在の人間は種的生命に對する對自的独立性を有せず、却つて種的生命の生成發展に奉仕する手段に外ならないのである。

個體を生み・生まれた個體をも手段にしつゝその生成發展を遂行して、生命が絶對の即自的直接態たる主體性を發動する裏には、直ちに生命の疎外性が成立つ。蓋し環境に於ける生存更に又環境に對する順應及び之れの同化に由る生命の生成發展は、實は同時に生命が環境自然に——究極的には物體に依據し之れをその本質的契機とする事を示すものに外ならない。環境に更には物體に働かれる事なしには生命はその主體性を發揮する事が出来ず、能動的作用性は

客體的實在に對する受動を通じてのみ發動する。疎外性は主體的媒介作用に不可缺である。生命は疎外的たると共に媒介的であり、その媒介作用の裏は直ちに疎外性である。この自己矛盾性は生命の本質に屬し、實は正にこの自己矛盾的構造の故に生命は生成發展の運動を起さざるを得ない。絶對は、正に斯くの如き疎外即媒介的なる自己矛盾的にして同時に生成發展的なる生命に、自己を疎外的に直接化したのである。逆に生命は、絶對に對するその疎外性との聯關に成立つ物體依存的な自己自身の疎外性を、それと矛盾的に對立する自己の他の一契機たる主體性により否定的に自己に媒介する事に依つて、自己自身の疎外性と同時に絶對に對するその疎外性を相即的に絶對否定して、絶對の否定的現成の媒介基體に自ら轉化せんとする。然しこの絶對媒介的轉化の活動は、生命に本質的な疎外性の故に、純粹活動たる事が出來ず、絶えず環境—物體に制約限定され同時にこれを逆に限定制約する所の環境—物體形成の作用たる外ないのである。換言すれば生成發展的自己形成は、常に實在的環境の特殊形態の形成と相即しその都度かゝる形態に結實する。之れ具體的には共同體の形成に外ならない。即ち共同體の形成は生命の本質から必然であり、それが生成發展の必然的所産である。が同時にそれは疎外的環境—物體との聯關に於いて形成され又之れを構造契機とするが故に、生成發展の所産でありながら同時に却つて生命の生成發展を阻害抑壓する。かゝる共同體を形成するに到つて生命の特殊性・種性は初めて具體的に對自化され同時にその疎外的性格は一層顯著になるであらう。こゝに生命の深刻なる自己矛盾性がある。蓋し生命の特殊性・種性は具體的にはその限界性であり閉鎖性である。生命自ら形成せる限界の共同體の中に自己を閉鎖するのであり、かくて生命は種的生命として特殊の形態に於いて實在するに到る。かの限界付けられたる共同體と種的生命とは滲透融即して一體をなし、種的生命の客觀的自己形成が共同體

であり共同體の構造主體が種的生命なのであつて、實在するのは兩者の融一體としての種生命の基體に外ならない。而して現實に於いて實在するものは、絶對そのものでなく又絶對の直接的自己限定態でもなく又單なる生命自體でもなくして、實は根底に遡源すれば右の如き種生命の基體なのである。而もそれは單なる定在ではなくして、絶對に對して呼應即相反的なる生命の生成發展に於ける媒介即疎外的なる自己形成の所産たる意味を持つ。従つてそれは生命の生成發展の基體的なる一階程として、生命の發展の根源的基體たるものでありながら、同時に生命の生成發展を閉鎖し阻害する否定的面を持つ。即ち種生命の基體は全體的生命の生成發展から自己を疎外して、自己自身の保存と維持といふ自己目的に機能を集する面を持つのである。例へば、人間の生命的諸規定の中でその行動性の故に最も注目される本能も、實は種生命の基體の自己同一の維持保存といふ目的により本質的に決定されて居るのである。成程本能は個體に於いて機能するけれども、その本性は個體的でなくして、實は種生命の基體の自己同一を維持保存するための、個體の行動の種前個體的なる法式に外ならない。個體は本能を具有する事に由つて又本能に導かれ決定される事に由つて、自ら右の目的に奉仕する。即ち個體は、自らの意志に由り又自らの知性に由つてその行動を決定するのではなく、本能の種的方式に導かれて自ら種生命を存続せしめるのである。本能は個體的意志と普遍的知性との成立以前であり、兩者の未分に融合せる前個體的根源である。本能は強力なる個體的自覺的意志よりも一層決定的に、又精緻なる普遍的自覺的知性よりも一層正確に個體の行動を規定し指導し、種生命の基體の自己同一を保存維持するであらう。

然し種生命の基體が、全體的生命の生成發展といふ普遍的目的から脱して、自己目的となり自己同一の保存維

持にその機能を集中する時、それは全體的生命の生成發展から疎外されたものたらざるを得ない。即ちそれは自己疎外に於いて自己を保持せんとするものである。こゝに種的生命の基體の原本的自己矛盾がある。而も全體的生命は種生命の基體の疎外的自己保存を突き破つてその生成發展を持續せんとするであらう。従つて種生命の基體はそれ自體に定在する事を得ずして、却つて自己自身の限界的閉鎖性を絶對否定的に突破して、全體的生命の生成發展に自己を媒介せざるを得ないのである。その時本能は已に正確且つ決定的なる規定指導の力を失つて、却つて自己自身を絶對否定する事を要求されるであらう。そこに於いては本能はそれ自身では全く無力であり盲目である。本能は新たな規定・指導の主體的機能に絶對否定的に轉化せねばならぬ。かくて生命はその直接的疎外から否定的に自己を恢復して、高次の生成發展の運動を起し、やがて人間的現實をその隅々まで張り渡す基底的契機をなすに到るであらう。(未完)——(二六〇〇・十二・五)

(三、種的共同體——共同的心性、四、結合社會——自立的個人性、五、國家——全人的實存性、の三篇を以下に論述せんとする。初めこの論文を第一部とし、教育的人間學及び教育關係の學を第二第三部として組織する意圖であつたが、矢張り問題の本質上それは不可であり、三者相互媒介的聯關に於いて論述する事が必然に要求される所以を自覺したが故に、以下の論考はかゝる自覺の具體的展開たるであらう。)